

町田市立博物館最終展 クロージング&テイクオフイベント
石阪市長・伊藤館長対談
2019.6.16



進行 岩澤 昌美氏

石阪 丈一市長

伊藤 嘉章博物館長

岩澤：伊藤館長はこの4月に館長に就任されたばかりということですね。簡単ではございますが、私の方から、伊藤館長のご紹介をさせていただきます。

伊藤嘉章館長は2013年に東京国立博物館学芸研究部長、2015年に京都国立博物館副館長、2016年から2019年3月まで九州国立博物館副館長を経て、この4月に町田市立博物館の館長に就任されました。そして、町田市立博物館の館長のほかにも愛知県陶磁美術館の総長、東洋陶磁学会の委員長も務められています。

日本陶磁史を中心に研究され、近代工芸や陶芸の国際交流のほか、伝統工芸分野や現代陶芸などの第一人者であります。ものすごい方が就任され、心よりお礼申し上げます。

それでは早速館長にお話をうかがいます。

このたびの展覧会では、町田市立博物館の工芸美術コレクション45年間の歩みを紹介したとうかがっていますが、どのようなコレクションなのでしょう？

館長：今回1部と2部に分かれておりまして、最初の部屋に入っていただきますと45年間の「集めた広がり」を見ていただけます。懐中時計があったり大津絵があったり、ガラスがあったりやきものがあったり。そこから奥の展示室に進んでいただきますと、ガラス、やきものという、町田市立博物館が築いてきた2大コレクションが100点紹介されています。みなさん「そんなもんか」と思われるかも知れませんが、普通の市立博物館や美術館で、こういうコレクションの塊ができるということはまずないんです。

ところが町田市の場合は、1983年に最初にボヘミアングラスを購入して、1987年にボヘミアングラスの展覧会をやって、今までで一番多い1万5千人を超えるお客様にご来場いただきました。そういった経過があって、作品を購入し、寄贈していただく機会も増え、ガラスのコレクション、そして、東南アジアを中心としたやきもののコレクションというすごく大きな塊ができました。普通はまずあり得ない、珍しいことなんです。

岩澤：「町田の当たり前」は、世界の当たり前じゃない、ということなんですね。コレクションの中に、二つの中心となる「ガラス」と「陶磁」があるということがわかりました。皆さんにここはどうしても観ていただきたい、伝えたい、という部分はあるのでしょうか？

館長：そうですね、ガラスについては、ヨーロッパのガラスもあれば、乾隆ガラスのような中国のガラスもある。そうかと思うと、近代・現代ガラスもあります。それから、今回、市長がお花を活けた花器は、岩田藤七の「貝」というガラス作品なのですが、工芸というのは使ってみてほしい。拝むように見るものじ



岩田 藤七 《貝》
1962 年制作

やなくて身近なもの、そういった世界をここでは感じていただきたいと思います。これからの我々の役目として、そういうことをお伝えすることが大事だと思っています。

それから、東南アジアのやきものを観ていただきますと、日本、中国、それから東南アジアのベトナム、タイ、クメール、ミャンマー、国によって少しずつ違う、あるいは国を越えても同じ部分がある。そういうことを知ったり、感じたりできるのは、これから

はすごく大事なことです。世界を見ることができて、日本のことを世界に対して伝えることができる、そういう人が「町田の当たり前」の中で育っていくような、そういう役割を町田の工芸美術館はしていくのかなと。

あともう片方ですごく大事なものは、町田市立博物館は今までに 273 回展覧会を開いています。博物館のコレクションを紹介する展覧会もあれば、他所から作品を借りてきて一つの展覧会として観ていただく場合もあります。これが実は、すごいことなんです。1 回観たらいいや、と思う方もいらっしゃるかも知れませんが、何度来ても、違う世界、新しい世界が広がっていく。273 回の中に、延べ 114 万人のお客様にきていただいたのです。すごいことですね。

岩澤：私も対談の前に展覧会を観させていただきました。

もともと白磁とか青磁とか、シンプルなものが好きだったのですが、一番奥に鎮座していた、トルコブルーと紫と白の壺、まさにこのパンフレットの表紙に載っていますが、この壺を観た時に、驚きました。こんなに色鮮やかなものもあったんですね、昔の時代に。



法花蓮花文壺
中国 15 世紀

館長：今回、展覧会を観ていただくと、ところどころに説明書きがあって、やきものが白ってというのは普通じゃないんだよ、なんて書いてあったりとか。そういう見方もできますし、同じ青でも産地によって全部違う。そしてガラスも。楽しい世界ですよ。

岩澤：でも、この壺自体もやはりその時には珍しいものだったんですか？ 偶然ではなくて、あえてこういうものを作ってみようと。

館長：これは法花（ほうか）というもののなのです。法律の「法」に「花」と書きます。「花」というのは、模様のことです。そして「法」というのは、乗り越えちゃいけないもの。中には越えてる人もいるかも知れませんが（笑）。境目を作って、その境目ごとに色を変える。それによって、くっきり色が出ています。

岩澤：石阪市長も、この対談の前にご覧になっていましたが、これはすばらしい、と思われたものがありましたか？

市長：やっぱり私も初めて知ったのですが、ガラスというものは透明が当たり前ではない、えっ、そうなんだ！と。もともとは透明というものはなくて、一生懸命作らないと透明なガラスはできないのだと。そんなことに感心していました。

岩澤：赤い地の上に黒が被せてあったり、黄色の上に黒が被せてあったり、すごく鮮やかなガラス作品が数々並んでいました。これらの作品以外にも、本当に大変特色のあるコレクションがいっぱいあったのですが、どうやってこちらの方に集められたのか、すごく気になりました。



黄地黒被花文瓶
清時代「乾隆年製」銘

館長：もともとここは 1973 年に郷土資料館という形で始まったのですが、それが 1976 年には博物館という名前になるんですね。その時点でもう美術館という構想もあって、美術も考古も工芸も広く、ということで集まってきました。その後、今度はボヘミアングラスをまとめて買う機会があって、それを展覧会に出したらすごく人気があって、工芸ということに視野を定めて集めていったということですね。

一方、考古の展覧会、あるいは民俗の展覧会もありまして。ちなみにこれまで 2 番目にお客様を集めたのは「町田の縄文展」という展覧会です。

今回の展覧会は、昨日の時点で第 8 位ですから、入れ替わりそうですね、今日の頑張りです。

岩澤：大勢の方に来ていただいて、珍しいものが揃うからこそ、ファンの方が意識して来てくださるということもありますよね。

館長：そういう中で、同じものでも、切り口を変えて観ていただくというのが学芸員の腕の見せ所でありまして、うちにあるものを基本としてほかのものを加えて大きな展覧会にして、観てもらおうというのも学芸員の腕の見せ所。今ですね、うちの職員にプレッシャーをかけているところなんです（笑）。何度来ていただいても、違う驚きがあるよねと。例えば東南アジアのやきもの展が何回もあつたりしますが、それはそれぞれ違う意味合いを持っていたりします。同じものでも趣向を変えて料理してお出しするのが、我々の仕事でありまして。我々のコレクションをお見せする、あるいは他所から借

「町田市立博物館最終展」 事業報告【資料2】

りてくる、そして皆さまの生活を豊かにするために観ていただく、そういう役割をしていくのかなと思いますね。

岩澤：「町田のあたり前は世界のあたり前じゃない」、そういった展覧会があると、寄贈していただく方も、ちょっとうれしい気持ちになりますね。

館長：東南アジアの陶磁器の展覧会をずっとやってきました。そうすると東南アジアの陶磁器のコレクターの方々の中には、ああ、あそこはああいうものも集めているのだ、じゃあ寄贈してあげようかと。そういうことによってこれだけすごい世界が広がってきたのですね。多分我々だけでやろうとしたら大変ですが、おそらく評価額、総購入額を合わせると10億円以上になります。そういうためには、我々は展覧会をして、皆さんの信用を得て、そしてもっとすばらしい世界になるように、努力をしていかなければならないな、と思うのです。

岩澤：先ほどの1万人目の方もボヘミアングラスが大好きで通っていただいたというお話ですが、そのあたりも力を入れなければいけませんね、館長。



館長：そうですね、はい。

岩澤：それから、アンケートの箱がありました。アンケートを書かれる方が列になっていたんですよ。どうしてもこれだけは伝えたい！というお客様がたくさんいらっしまったのも、この博物館の魅力ではないでしょうか。その声がかもしたら形になっているからこそ、アンケートに書きたいという思いがあるのかも知れません。これは逆に、私が館長にプレッシャーをかけております。

館長：ありがとうございます。言ってもらえるうちが花というやつですね。

岩澤：そういったお客様の声というのも、もちろん形にしたいなというのはお持ちですか？

館長：そうですね。やっぱり、どうしても我々は自分の目線というものになってしまうんですね。お客様のお感じになっていることは、教えてもらわないとわからないところがありまして、本当に、言ってもらえるうちが花だなと思います。いっぱい言ってください。そして、たまにちょっとほめてください（笑）。

岩澤：是非、皆さまの声をお聞かせください。よろしくお願いいたします。

皆さまに支えられて、この日を迎えることになりました。このファイナル、館長から見てどうですか？

館長：皆さまが愛してくださっているのがわかります。第1部と第2部で、先程も申しあげたように「広が

り」と「深まり」を見ていただくのですが、それぞれの中に町田だからできあがったものがあると思うのですね。

先程来「お好きなものはどれでしたか？」という話が出ていますが、皆さまにも一つこれは好きだなというのを、心の中に持って帰って欲しいですね。例えば、それによく似たものをご自身の生活の中にどこかで見つけてくる、あるいは自分で作ってみる。そうするとちょっと幸せになれる、それを何回も、ちょっとちょっととやると、随分幸せになれる。

岩澤：市長はこの会場の雰囲気をご覧になられたと思いますが、市長の目からはこのファイナル、どのように映っていますか？

市長：そうですね、私はやっぱりガラスの方に興味があって。ガラスというものは透明が当たり前ではない、と知ったことを先ほども話しましたが、岩田藤七さんの作品はかなり透明で、そこに赤い色が入っている、この赤い色が何とも言えない、いい色なんですね。やっぱり明るさというものがあの場の雰囲気を作っているし、岩田さんのガラスは皆さんの気持ちも明るくするのかなって思っていました。皆さん一生懸命必死に解説文を読んでいて、この作品を覚えようというか、熱心なですね。びっくりしました。

余談ですが、3年前かな、知事との会談で都庁に行ったとき、控室に岩田藤七さんの赤いガラスがあった。なんだ、うちにもあって当たり前なのだと思ったけれど、そうでもなくて、都庁でもコレクションとして価値がある。あの赤い色がきっと魅力的なのだなと思いました。

岩澤：本当に皆さんに愛されて、自慢にしてもらえる博物館。いよいよ本日が最終日になってしましますが、クロージング&テイクオフということです。テイクオフということはまだまだ先がございます。そのあたりを少しうかがいたいのですが、どのような始まりを私たちは楽しみにして、待っていたらいいのでしょうか？

館長：そうですね。当たりのことなんですが、これだけ集まったものをどういう形にしてくれるかという皆さんの期待がすごくあります。もう片方で、今までやってきたような、他所でやらないようなちょっと面白い展覧会。そういう展覧会を、274回目、275回目、276回目、としっかりやってくれることを期待されていると思うのですね。

それから、あちらに飾られた市長のいけばなを見ていて思ったのですが、我々は展覧会ですと花器だけを見るんです。それが、実際に使われているところを見ると、また違う見え方がしてくるんですよ。単に青い器と見ていたものが、青い器と赤い花と、そして白い花がある。そうするとまた、全然違う世界に見えてきて、ああ、あの藤七のゆらぎというのは、お花の世界と合うよね、ってわくわくしてしまう。そう思うと、こういう世界を新しい美術館でいっただうやって見せようか、どうやって感じてもらおうか、どうやって触れてもらおうか、それが大きな課題になると思うんです。それを特に子どもたちにも感じてもらいたいです。そのためのワークショップだったり、工房だったり、実際に使ってい

る世界を体験してもらいたい。

正直言いますと、あまり解説文を一生懸命読んで勉強しなくてもいいですよ（笑）。絵画を観るにはすごく勉強した方がいいのかも知れないですけど、工芸というのは本当に身近なものですので、「好きだな」「こういうの欲しいな」という気持ちを大事にしていれば。

岩澤：イベントの中に、親子のやきもの体験講座などありましたが、大人の私たちでも陶芸って体験できるじゃないですか。お茶碗作ってみようやってみるんだけど、うまくいなくてお皿になっちゃって、でもそれに愛着が湧いて。私たち日本人ってお箸とかコップとが普通なんだけど、世界とは違うということさっき、館長から聞きまして、そうなんだ、このお茶碗も工芸品なんですね、と思うとすごく身近に感じられました。

館長：どうも私が話すときやきものことばかりになってしまって（笑）。

日本人は、自分のお茶碗をもつ、自分の湯呑みをもつ、あるいは自分のマグカップをもつ。これね、たぶん世界ではないことです。全部自分のものなんですね。めいめいが。例えばオランダ王室に行ったら何がすごいかというと、500人分のテーブルセットが同じ種類で揃えられるというのが偉い。かたや日本人にとっては、それぞれがそれぞれに好きな器を使っていますよということが大事。器を手で持つというのも日本の文化です。大概、器を持たないで箸とかスプーンとかフォークを使って食べる。日本人は手で持つ。それだけ器を大切にしているんです。それが「日本の当たり前」で、ここで、そういうことがすごくいいことだと知ってもらって、町田の子どもたちが世界に行くと、日本ってというのはね、こういういいところがあるんだよ、と言えるような人たちになれるといいですね。

岩澤：「芹ヶ谷公園 芸術の杜」について市長におうかがいしたいのですが、その前に、皆さまもおそらく気にしていらっしゃる、こちら。市長が活けられました。すごいんですよ。市長はおおらかで、即決する方だと勝手なイメージを持っていたのですが、この市長がお花を持って、長考するんですよ。意外な一面を見ました。このお花のポイントを少し教えていただいてもよろしいですか？せっかくですのでご紹介お願いいたします。



市長：とにかく花器が岩田藤七さんのガラス作品で、青だということを聞いていまして、今日、初めて花器に直面したんですね。青のガラスにどういう風に活けるかということだけ、ずっと2週間くらい考えていました。今朝、近くの公園の横っちょとか空き地とか、あちこちから集めてきました。ザクロだけは庭にあったものを切ってきたのですが、それ以外は集めてきたのです。それで、新しい工芸美術館の構想というのはもう始まっている

【いけばな】
石坂 丈一（小原流）

花材：ザクロ ムラサキツユクサ ホタルブクロ
アカバナユウゲショウ ドクダミ 黄蝶

【花器】
岩田 藤七 《貝》
1962年制作
2002年 旧岩田工芸硝子株式会社寄贈

わけですが、「芸術」と「実業」、その微妙なところに工芸美術館がいるんですね。

芸術というのは、これは私の勝手な論なのですが、今まであったものをそのままやるのはダメだというのが私の考え方なのです。お花についても、今までやってきたものをそのまま引き続きやるというのはあまり面白味がないですね。見ていただくとわかるのですが、雑草と言われているものを活けたんです。「雑草を活けるって、なんだそれ」って言われそうですが、あんまりないんですね、雑草を活けるのって。朝採ってきたものを活けるってあんまりないわけです。それともう一つは蝶々がいるんですね。

岩澤：あの黄色の蝶々ですね。

市長：私が作ってきた蝶々なのですが、だいたい、いけばなになんで蝶々がいるのかってことなのです。奇想天外なんです、そんなにおかしくはないわけです。お花があって、そこに蝶々がとまっているという



うか、ぶら下がっているというか。今までなかったものを作る、これがチャレンジで、工芸美術館も今までどこかにあったものを作ろうっていうのはダメだろう、ということが言いたくて、これを活けたということなんです。

ちなみに、私は小原流の免状を持っているのですが、もちろん活け方のルールはあるんですけど、小原流は自然をうつすというか、そういうのが一番多くて、流派からはそんなに外れていないと思っています。

岩澤：素晴らしいです。お花を選ぶという気持ちから始めるのだなと思って、そこら辺のと言ったら変ですが、本当にそこら辺の花を選んでこのような形にしたというのが、芸術の杜につながっているのだと今すごく理解ができました。ありがとうございます。館長、そういうことですね。花器を観る、花器に触れる、お花を活ける、これ一連で「工芸」でいいんですよね？

館長：そうです。やっぱり、誰でもできるんです。ちょっとやるだけで絶対違うんですね。それをわかってもらえたりするだけで、どんどんどんどん幸せになれるような気がするんです。

岩澤：「芹ヶ谷公園 芸術の杜」がますます楽しみになりますね。ちょっと、そのあたりのお話を聞かせてください。

市長：まだまだ具体的なことが決まっているわけではないんですが、新潟に行った時に、子どもたちがガラスの加工をやる所があったんですね。その日に吹いたガラスはかなり高温ですから、そのまま持ち帰れないので、後で送ってもらうのですが。それでもやっぱり、そこに行って自分でガラスを吹いて、という所があるってすごくいいなと思って、それをやろうか、と言ったら、うちの職員が首をかしげていましたけれど（笑）。実現できるかどうかわかりませんが、そうやって大人も子どもも、やきものやガラス、工芸というか実用品ですね、そこに参加できる、そういう美術館でありたいなと思います。

岩澤：芹ヶ谷公園に版画美術館がすでにあって、ものすごく美術、工芸が集まった公園になりますね。館長。

館長：版画美術館があるというのはかなり珍しいですね。そこに工芸美術館ができるというのは、とても面白くて、しかもそこに市長が今おっしゃったような、物を作ってみようかとか、使ってみようかとか、いろんな形を取り込んでいくことができれば、楽しいですね。

今回、ファイナル展ということで、なんと 37 回もイベントをやっているのです。これをずっとやっていたら、うちの職員全部死んじゃいますので、そこまではできないのですが（笑）、いろんなことを試すということで、今回やってきています。いろいろ実験みたいなことをやってきているので、これからもそれをしながら、今度オープンする時は面白いことをやろう。だから、うちの作品をいろいろ観てもらうこともやるし、国宝・重要文化財をどーんと持ってくるような展覧会も是非やってみたいと思います。ちょっと予算的なことも市長にお願いしておかないといけない（笑）。あるいは「今回お前らそうきたか！」と言われるようなものも、きっとお見せできると思います。とにかく蓋を開けてみると「おっ！」と言われるようなことをしたいなと思っています。

岩澤：場所も最高ですよ。芹ヶ谷公園の案内にも出ていますが、中心街から行って、緑の中を木で作った階段を降りていって、そこを抜けると噴水があって、子どもたちが遊んでいて、桜の季節もきれい。すばらしい所にできる。これも理想的ですね。

館長：私は前に九州国立博物館にいたんですが、太宰府天満宮の横にあります。そこは参道の門前町と言いますか、参道が楽しくて、お宮さんがあって、そこを抜けると九州国立博物館がある。ここも町田の中心街があって、そこを抜けると文学館があって、森があって、版画美術館、工芸美術館がある。全く違う世界がどんどん繰り広げられるともうフワフワするような、比較すればするほど、両方の驚きを強く感じるのですね。都会的なものもすぐ見つけられる。そこに緑もある。そこに美術がある。そこに生活がある。工芸美術館に行って、作品を見てこれすごいなと思って、帰りに思わず自分の器を買ってしまった、そういうことがあるみたいな。

岩澤：町田駅はすごくにぎやかなのに、歩くのにちょうどいい距離で、歩いて行って緑に癒されて、館内に入ると。

館長：私は千葉県柏市民なので、すごくうらやましいです。柏の人には内緒ですが（笑）。

岩澤：会場にいらっしゃった方は、この町田市は改めてすばらしいまちだ、と思っていただけたと思います。これまでの 45 年間のご愛顧に感謝して、これからの活動にも期待させてもらえるお話を聞かせていただきました。本当に期待しちゃっていますので、ぜひよろしく願いいたします。石阪市長と伊藤館長に、今一度大きな拍手をお願いいたします。